

カルティエ現代美術財団

石上純也—FREEING ARCHITECTURE

2018年3月30日～9月9日

カルティエ現代美術財団は、2018年3月30日から9月9日まで、石上純也の作品を集めた初の大規模な個展、*Freeing Architecture* (自由な建築) を開催しております。日本の有力な若手建築家として異彩を放つ石上 (2010年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞受賞) は、周りの風景が重要な位置を占める観念的かつ詩的な作品を生み出すクリエイターです。

石上は、カルティエ財団のために特別に構想された今回の個展で、アジアとヨーロッパにおける自身の建築プロジェクトの中から20作品を選び、構想から建築までのさまざまな段階を記録した映像やドローイングとともに、各プロジェクトを大型模型群で紹介しています。ジャン・ヌーベルの代表的建築物との対話ともいえる本館での展示は、カルティエ現代美術財団が一人の建築家を集める初の大規模個展です。



Art Biofarm (アート・バイオフィーム) の透視図 © junya.ishigami+associates

“ぼくは、建築について自由に考えたい—それは、建築に対する見方を、できるだけ柔軟かつ大局的に、緻密に広げていきたいからです。「建築とはこういうもの」というステレオタイプを超越したいのです” 石上純也

ユニークな作品で数々の賞を受賞

石上は、自然 (風景や雲や森など) の中における自身の建築プロジェクトの位置づけをたやすく見きわめ、外部環境と屋内空間の境界を取り除きます。もともとそこにあった自然の中に作品を据えながら、幻想の世界を作品の重要なエレメントとして際立たせることで、彼はその感性を高潔さという高みまで押し上げているのです。

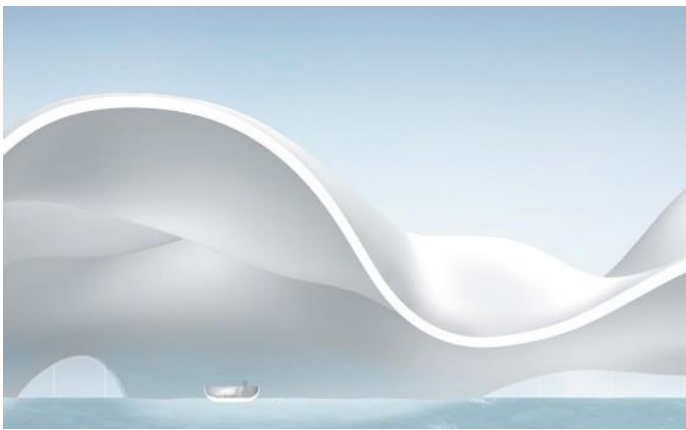
1974年神奈川県で生まれた石上は、日本の若手建築家の一人であり、ニューヨーク近代美術館で大規模な展覧会が行われたばかりの伊東豊雄や妹島和世に続いて、2000年代に頭角を現した世代です。東京藝術大学で学び、SANAAで建築家としての経験を積んだ後、2004年に石上純也建築設計事務所を設立。建築のルールや制約から自由に見える彼の作品は、すぐにその非凡さを認められ、数々の賞を受賞しました。主な大型プロジェクトは以下の通りです：

- ・神奈川工科大学 KAIT 工房の建設 (2008年)：内部空間と周辺環境の連続性と、明るさが目を引く
- ・モスクワ科学技術博物館のリノベーションと、ミュージアムパークへの転換 (2010年～)
- ・「House of Peace (平和の家)」の設計 (2014年、コペンハーゲン)：平和の象徴として海上に建つ、雲の形を模した建造物

プレスリリース

建築模型

Freeing Architecture で石上は、建築における機能、フォルム、規模、環境を表現し、そこからこの分野の将来的ビジョンを示しています。展示では、40点を超える模型と膨大な映像やドローイングを通し、20 作品のプロジェクトの発端から実現に至るまでの複雑なプロセスを紹介します。展示用に組み立てられた模型は、実際の建築のためのツールとしての役割は一切持っておらず、この展示会場のためだけに作られたものです。スタジオで1年間にわたって手作業で組み立てられた作品群をじっと見ていると、最終形に至るまでの多くの段階と苦勞の跡が見て取れます。素材、サイズ、精緻さの度合いはすべて異なりますが、どの作品からも、石上の建築作品の創造に必要な、緩やかな成熟過程を垣間見ることができます。作品には、理論・知識・技術を駆使した実験から得られた詩歌が吹き込まれています。



「House of Peace (平和の家)」の断面図 © junya.ishigami+associates

自然現象としての建築

自由への真のオード (詩歌) といえる展示 Freeing Architecture では、ノウハウや建築思想の枠を超えて自らの活動を考える、石上の並外れた能力が発揮されています。見る者を作り手のイマジネーションへ誘いこみ、幾多の詩的で繊細な世界を見せるのです。例えば、空に引かれた1本の線がモニュメントとなり(Sydney Cloud Arch—シドニーの雲のアーチ、シドニー、オーストラリア)、子どもたちのイラストや動画のコラージュは、幼稚園の屋根の模様に仕立てられています(Forest Kindergarten—森の幼稚園、山東省、中国)。石上は建築について、沈降や浸食によって時間をかけて成型される石のように、自然に形が出来上がっていくものだと語っています。日本の関西地方で進むあるプロジェクトでは、シェフのいるレストラン兼住まいが、「1つの石」をモチーフにデザインされています (House and Restaurant—家と食堂、山口県)。大学生のための、大地と空に挟まれたセミオープンスペースは、架空の地平線に縁どられた、移ろいゆく空を連想させます(University Multipurpose Hall—大学の多目的ホール、神奈川県)。

プレスマネージャー

Matthieu Simonnet

matthieu.simonnet@fondation.cartier.com

Tel.+33(0)1 42 18 56 77

新しい景色

石上は、どの建築プロジェクトにおいても、周辺環境は欠かせない部分だと考えており、その風景を強調し、ときには変換して、作品の中に取り込みます。その一例として、全長 1km の遊歩道エリアに新たに造った湖 (日照市、中国) や、300 本以上の木を隣接した敷地に移植した森林プロジェクト (栃木県) があります。



外部から内部に入る様子を示す Chapel of Valley (谷間のチャペル) の透視図 © junya.ishigami+associates

1 つの建築プロジェクトとしてデザインされた今回の展示は、展示が行われる環境、すなわち、ローター・バウムガルテンの庭に囲まれた、ジャン・ヌーベルの建築と一体となることで意味を成します。展示では細部まで空間演出にこだわっており、それぞれの部屋で新たな風景が立ち上がります。そのため、訪れる者は、曲がりくねった小路を進んでいるかのように、絶えず新たな視点を発見することになります。優美な曲線が特徴的な、高くそびえる教会の10分の1の巨大模型(Chapel of Valley—谷間のチャペル、日照市、中国)は、本物の植物を臨むガーデンハウス沿いに設置され、オランダの公園 Park Vijversburg のビジターセンターの透明でしなやかなラインは、地表面に設置されています。作品は親和性によってグループ分けされ、“幼児期の世界”や“雲の諸相”といった章立てで展示されています。仕切りのないカルティエ財団のオープンスペースに並べられた大小の模型と、膨大なコラージュやドローイングが、厳粛さ、夢幻性、遊び心、静けさを併せ持った雰囲気醸し出しています。

プレスオフィサー

Léa Soghomonian

lea.soghomonian@fondation.cartier.com

Tel.+33(0)1 42 18 56 65



神奈川県工科大学の工房内部の様子
© junya.ishigami+associates



House and Restaurant（家と食堂）の模型の写真
© junya.ishigami+associates

変幻自在な作品の見方

子どもの庭、教会、美術館、手入れの行き届いた庭、一軒家レストラン、ガーデンハウス、モニュメント、都会的な彫刻—展示 *Freeing Architecture* で紹介される多彩な建築の数々は、絶え間なく再構築されるフレキシブルな作品群の、豊かさと複雑さを伝える役割を果たしています。単一のスタイルの可能性そのものを拒絶することでこそ、石上純也は逆に、それぞれの環境、機能、住民、来場者によって決まってくる個々の美的コンテクストに刻まれた、各建築の銘を守ろうとしているのです。彼はどのプロジェクトにも先入観を持たずに取り組み、美的観点と技術的観点の両面から、作業全体にすぐさま問いを投げかけます。

作品に現れた合理性によって、建築物の計り知れない複雑さは、意図的に隠されています。石上は、建築物を建てるまさにその現場の土を、コンクリート構造物の土型に使います(House and Restaurant 一家と食堂、山口県)。また、伐採が決まっている森全体を移植することで、木と池が点在する夢幻の風景を構成します(Art Biofarm—アート・バイオファーム、栃木県)。そして、基礎部分をむき出しにして巨大化させることで、地下からのミュージアム拡張を考えます(Moscow Polytechnic Museum—モスクワ化学技術博物館、ロシア)。詩歌と素朴さが吹き込まれた石上純也の作品。その裏側にあるのは、技術へのあくなき挑戦心と、建築という枠組みにおける人間の居場所への探求心です。

石上純也氏が出席する Nights of Uncertainty（不確実性の夕べ）

展示期間中、「石上純也の世界」をテーマとした Nights of Uncertainty を複数回開催します。石上氏本人も出席予定です。イベントでは、建築家たちのディスカッション、哲学者・エンジニア・評論家による講演、音楽の夕べ、“Architecture for the Senses（感覚のための建築）”というテーマにまつわるさまざまな対話が予定されています。